こども教育会議　会議録（速記メモ）

日　時	場　所	出席
平成 30 年 9 月 25 日（火） 13:30～14:40	武雄市役所 ４階会議室	小松市長、浦郷教育長 教育委員（一ノ瀬、岡本、森、犬走、奥川、貝原、副島、大庭、馬場） 岩瀬福祉部長、牟田福祉部理事 福祉課（後藤課長、古田課長代理、山口主幹） 健康課（永渕参事、山口主幹） 松尾こども教育部長、山口こども教育部理事 教育総務課（諸岡課長、樋渡課長代理） こども未来課（田嵜主幹、田中係長） 学校教育課（竹内課長、百合参事） 古賀企画部長 企画政策課（松尾課長、富永、筒井）

１．協議件名	第１７回こども教育会議 （発達障害等困り感のある子どもたちの支援体制について）

議事録

内容

1　開会（進行：松尾企画政策課長）

2　議事（議事進行：小松市長）

（1）発達障害等困り感のある子どもたちの支援体制について

①話題提供

⇒冒頭に、福祉課から、今年度から取り組んでいる「教育と福祉の連携会議」の経過や見出された課題等について説明し、その後出席者で意見交換を行った。

②意見交換

＜出席者の意見＞

・特別支援に対する理解が以前より深まってきたと感じる。就学相談への声掛けについても、子どものためにと考える保護者が増え、受け入れてもらいやすくなってきた。

・一人一人の成長を促すには、少人数できめ細やかな指導がいい。ただし、特別支援学級の学級数や在籍数が増えている現状を踏まえると人的配置の課題がある。まずは幼稚園、保育園、小学校、中学校の連携を深めて対応していく必要がある。

・官民一体型学校でたくさんの地域の方が学校に入ってきてもらっているが、これは地域の方が学校には多様な子どもたちがいることを知るきっかけともなっており、結果的に特別支援教育に対する地域の理解を深めることにつながっているのではないか。

・医療的ケア児のサポートをする家族に対する支援、サポートする人をサポートする視点が必要である。

・（自身の経験から）家庭との連携は必須。早期に適切な対応をすることが大切であるが、保護者にいかに理解してもらうかが難しい。

・インクルーシブ教育（inclusive education system、※障害者の権利に関する条約署名時仮訳：包容する教育制度）は、とにかく「含め」ばいいのではない。教育大綱「組む」のように各々に交じり合うことが、支援体制を含めその他の課題を解決できるのではないか。

・家族の支援が早期からあるのとないのでは子どもの将来の発達に影響する。ペアレントトレーニング（※）の仕組みが必要。

※ペアレントトレーニング…発達障害者の親が自分の子どもの行動を理解したり、発達障害の特性をふまえた褒め方やしかり方を学ぶための支援（出典：厚生労働省ホームページ）

・困り感のある子どもの中には、周囲の心無い言葉に傷ついていることがある。周囲のこどもたちを育てることも大事である。
・専門性をもつ方に気軽に相談できる体制が身近にあればいい。保護者が相談したいと思っても、どこに相談したらいいかわからない。
・できるだけ早期に支援、連携することが大事。保護者は子どもの困り感に気付いていても、自らそのことを他の人に相談しにくいところがある。逆に専門性を持つ方から保護者に対するアプローチが必要ではないか。
・保護者が相互に相談や情報交換ができ、悩みを共有できる親同士の横のつながりの“場”が必要。
・障がいの有無に関わらず、就労している方は誇りをもって働いている。そういった方を武雄市の重要な財産としてとらえ、就学期等のそれぞれの段階でどのような手当や支援を行う必要があるかという発想が大事である。その発想がないと武雄市全体で見守っていく土壌や空気は生まれないのではないか。
・学校訪問時に、困り感のある生徒が在籍するクラスで、その生徒に配慮し、教室の前面の掲示物等をすっきりさせている教室を見学した。学校が困り感のある生徒の困りごとを、一般論にしてあげている配慮を垣間見た。今後はそのような視点が大切になっていく。
・武雄市では、平成 25、26 年度に文部科学省の「発達障害に関する教職員の専門性向上事業」の研究指定を受け、市内の先生は全員が発達障害の研修を受けた。その後、各々で先生方は勉強し、スキルアップしていっている。
・通級指導教室は、現状６校（小学校５校、中学校１校）であるが、自校にない場合は、保護者の送迎が必要になっている。理想としては、各学校にあって欲しい。
・切れ目のない支援には、小中学校のみならず、高校段階でも適切な支援が必要。

＜市長の発言＞
・武雄市は、行政のみならず、民間組織で頑張っていただいていることころがたくさんある。それらの良さを見つけて、いかに組み合わせてという発想が大事である。
・“学校教育だけ”“福祉だけ”という単一なものでやる必要はなく、組み合わせることで達成するという発想が大事である。
・本人へのサポートはもちろん、家族に対するサポートという視点や、保護者同士のつながりという視点も今後の対応に加えていきたい。

3　閉会（進行：松尾企画政策課長）